

苦境に陥った時、ただ慌てふためいては打開の妙手は生まれません。活路を見いだすには、冷静に現状を受け止め、時に視点を変えることも必要でしょう。

経営には波があります。およそ事業というものは、成功と失敗、好不調というリズムをもつて進んでいきます。大切なことは、苦境に陥った時、そこからつながる成功をどうやって手繰り寄せるかにあります。

そのポイントは、①冷静に現状を受け止める、②時に視点を変えるということでしょう。

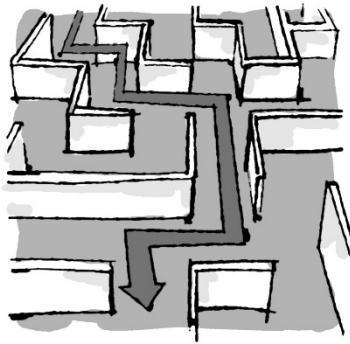
イソップ寓話に「カラスと水差し」という話があります。長い旅をして、喉が渴いていたカラスが水差しを見つめました。しかし、水は底に少ししか入っていません。しかも、くちばしが水に届かないのです。

あらゆる手段を講じてても水を飲めず、万策尽きた時、カラスはある名案を思いつきます。それは、小石をくちばしでつまんで、水差しの中へ落としていくことでした。すると、中の水はどんどん高（かさ）を増して、ついにくちばしのところまで届いたのです。こうしてカラスは喉を潤し、また旅に出ました——というお話です。

おそらく、水差しを壊したり、動かしたり、その形状といった外面にだけ視点が向かっている間は、名案は浮かんでこなかったでしょう。困難な状況に陥った時、私たちは、先のカラスと同じように、問題の外面と形状だ

活路はどこに

## 困難打開の妙手は 自分の中にある



けに目がいくことが多いのではないのでしょうか。

「活路」を「どこに」と外に求めている間は、なかなか活路は見いだせません。倫理経営では、自らの力ではどうすることもできない外部要因（たとえば、景気や時代の変化、また、他社の動向）ではなく、視点を内側に向けます。その目は、他社から自社へ、社員から自分へ、さらには、会社から自らの家庭にも及びます。

倫理研究所が発行する月刊誌「新世」には、毎月、倫理経営の体験談が掲載されますが、すべての体験報告者に共通するのは、この視点の転換があることです。

資金調達、社員との確執、二代目社長の苦悩など、人を恨み、親を責め、相手を非難している間は、状況は改善するどころか、悪化の一途を辿るのみ。そこから転じて、ひとたび自社と自分自身の心を見つめ直した時、かつ然と活路が開かれます。

そして、取り除こう、解決しようとしていた、当の苦難自体が、会社を向上せしめる種であり、活路そのものであったことに気づいていくのです。

**「見不幸のごとく見える事は、それは実は、幸福への入口を「ごだぞ」と示している。ただ、その門は閉ざされている。思いきって、たたけ、押せ。しからば、さっと開かれよう。」** 丸山敏雄著「天類の朝光」

迫り来る苦難は幸福の入口。救いを「どこに」と求めたくなったら、視点を自社と自己に向け直し、苦境のただ中になれば、それは「幸福の門」であると口ずさんで、

開ざされた門を思い切つて開いてみましょう。